

いしいしんじ『麦ふみクーツェ』論

～「クーツェ」の役割と

『ぶらんこ乗り』との比較から見る世界とつながる方法～

文21-414 竹原友香 (国語国文学専修 国文学コース)

【目次】

1. 作品の概要
2. 研究の目的
3. 「クーツェ」が行う「麦ふみ」の意味
4. 「クーツェ」の正体
5. 『ぶらんこ乗り』との共通点と相違点
6. まとめ

1. 作品の概要

いしいしんじ『麦ふみクーツェ』

2002年6月（理論社）から書き下ろしで出版

麦ふみとは、「麦の伸び過ぎを押さえ、根張りをよくするため、早春、
麦の芽を足で踏むこと」

新村出編『広辞苑 第七版』、岩波書店、二〇一八年一月より

【あらすじ】

主人公「ぼく」は、「クーツェ」と名乗る謎の人物と出会う。絶えず「麦ふみ」の動きを続ける「クーツェ」と交流できるのは「ぼく」のみである。「クーツェ」は「とん、たたん、とん」と「麦ふみ」の足音を響かせながら、「ぼく」が経験する困難を予言したり、それに対して助言を与えたりする。

異常に背が高く心臓が弱い「ぼく」は、吹奏楽団のティンパニストである「おじいちゃん」から楽器として育てられた少年で、「ねこの声」という楽器の音を自分の声で再現できる。その特技から「ねこ」と呼ばれる「ぼく」は、「おじいちゃん」と「父さん」の三人で暮らしていた。多くの困難や、生きづらさを抱える「へんてこ」な人々との出会いを通して音楽観を磨いていく「ぼく」の耳には、いつも「クーツェ」の足音が聞こえていた。

2. 研究の目的

★「クーツェ」にとっての「麦ふみ」の意味と、「クーツェ」の正体を考察する。

★いしいしんじ『ぶらんこ乗り』（2000年12月，理論社）とも比較しながら、本作の主題を考察する。

【注目したところ】

- ・音の根源である「クーツェ」自身が「麦ふみ」について語る言葉
- ・「クーツェ」が「ぼく」に「麦ふみ」の足音を響かせるタイミング
- ・「ぼく」の「おじいちゃん」の故郷にある「クーツェ」を歌った民謡の存在
- ・『ぶらんこ乗り』の「弟」と『麦ふみクーツェ』の「ぼく」が歩んだそれぞれの道のり

【音楽家を目指す「ぼく」の道のり】

音楽専門校に入学

「クーツェ」と
出会う

街の吹奏楽団と合奏

過酷な学校生活に苦しむ
結果落第する

「ちょうちょおじさん」からの紹介

盲目のチェリスト「先生」の
もとで音楽を学ぶ

若き指揮者へと成長していく

3. 「クーツェ」が行う「麦ふみ」の意味

【① 麦ふみの農業的な意味を教えてくれる農夫の言葉】

- ・「(前略)つぶれちまった苗も、畑の肥料になるんだしな、だめな麦なんておれは一本だってないんだとおもうがね。麦は要するに、ぜんぶ麦だ。」(p.435)
- ・「いい悪いってことはないよ、麦ふみをするのに」(p.435)

➡無駄になる麦はない。いい麦か悪い麦かは考えず平等に踏む。

【② 「クーツェ」自身が語る「麦ふみ」】

「土。みみず。麦。ねこもふむよ。みんな同じだ。」(p.40)

「いいこと？わるいこと？」
「みんなおなじさ、麦ふみだもの。」
「つぶれた麦は、そだつ麦。くさった種は、はたけのこやし。ぜんぶの麦をひらたくふんで、麦ふみクーツェは、とおくまでいく。」
(pp.100~101)

ぼく「いいも悪いもない、きみはただ、麦ふみをつづけるしかないんだね」
クーツェ「むろんだよ」
(p.128)

踏む対象は麦だけではない

街に起こった悲劇を嘆く「ぼく」に対し、「麦ふみ」の話で返す「クーツェ」
→「ぼく」を「麦ふみ」で踏まれる麦のように捉えて話す

「麦ふみ」は「クーツェ」の使命

➡「クーツェ」が行う「麦ふみ」は単なる農作業ではない。

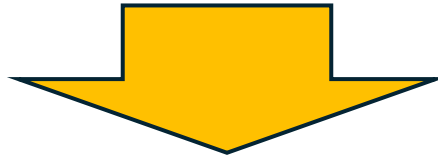
3. 「クーツェ」が行う「麦ふみ」の意味

【③「ぼく」に「麦ふみ」の足音を響かせるタイミング(例3つ)】

- ・消えた打楽器の代わりに「ぼく」の「ねこの声」を使うことが決まった時
⇒「ぼく」にとっては初演奏
- ・「先生」のもとで音楽を学ぶよう勧められた時⇒音楽を極める新しい道へ
- ・過酷な音楽専門校の生活に耐えようとしている時⇒音楽を諦めない強い意志

→「ぼく」は、音楽家を目指す人生に大きく影響する出来事や、自身の人格形成に関わる極めて重要な場面周辺(成長のチャンス)で足音を聞く。

①, ②, ③より「麦ふみ」とは…



世界全体を麦畑として捉え、その良い成長を促す行動

○麦 = 「ぼく」を含む世界中のあらゆる生命

○「とん、たたん、とん」 = 「ぼく」を踏む音

○「つぶれた麦」 = 作中で亡くなる人々

(「父さん」、「用務員さん」、「セールスマン」…)

→「ぼく」は彼らの死を「はたけのこやし」にし、
「そだつ麦」として成長する。

4. 「クーツェ」の正体

【「クーツェ」と「おじいちゃん」の故郷の関係】

① 「おじいちゃん」の故郷に「クーツェ」を歌った民謡がある。

ふめよ、ふめふめ、むぎふみ、**クーツェ**
とおくの、おそらへ、おもいくつ、あげて
しろくろちゃいろ、ぺっちゃんこに、ふんで

(pp. 300~301)

「庶民の集団生活の場で生まれ、
多くの人々に長く歌いつがれ、生活
感情や地域性などを反映している」

新村出編(『広辞苑 第七版』、岩波書店、二〇一八年一月)より

② 「おじいちゃん」の故郷に昔からある古い言い回しの一つに、「クーツェ」という言葉がある。

クーツェ = 「ずいぶんなかわりもの」

(変わり者である「おじいちゃん」も、「クーツェ」と呼ばれていた過去がある。)

①, ②より「クーツェ」とは…

「おじいちゃん」の故郷に昔からいる妖怪や精霊といった、
靈的な存在として捉えることができる。

いつも麦ふみをしている
異様な存在「クーツェ」

いつしか「クーツェ」
という言葉そのものが
「ずいぶんなかわりもの」
を指すようになる。

「ぼく」の前に現れた
今も、世界を踏む
使命を全うしている。

5. 『ぶらんこ乗り』との共通点と相違点

【「弟」と「ぼく」の共通点】

① どちらも、周りとはどこか異なる存在「へんてこ」な人物と言える。

弟⇒外国の本も読めるほど知的に早熟、事故でおぞましい声に変化
ぼく⇒楽器として育てられる、異常に背が高い

② どちらも、「あっち側」（この世の外）の存在と接触する。

弟⇒白い光から現れる動物 ぼく⇒「クーツェ」

【「弟」と「ぼく」の相違点】

「あっち側」と「こっち側」を彷徨った結果…

弟⇒「あっち側」に消える ぼく⇒「こっち側」へ戻って来る

なぜ、「ぼく」は「こっち側」に戻れた？

「ぼく」は様々な「へんてこ」と出会い、
「へんてこ」が強く生きる方法を学べたから。

作者の言葉「こっちとあっちがあいまいだったのが、いろんなへんてこな人たちに出会って、いや、こっちにちゃんと生きるんだと決心する。」

いしいしんじ（対談・取材者：瀧晴巳）「いしいしんじオーケストラの一番後ろで、じっと立ってる打楽器奏者って、変だよなあ。人間ってみんな、へんてこなんですよ」（『ダ・ヴィンチ』、KADOKAWA、第九巻第七号、二〇〇二年七月）より

★わざを磨く★

→自分の「へんてこ」さに
誇りを持てるように

6. まとめ

- ・「クーツェ」にとっての麦畑は世界そのものであり、良い麦畑への成長を促すために踏んでいる。
- ・「クーツェ」は「おじいちゃん」の故郷に昔からいる霊的な存在。
- ・「ぼく」が「こっち側」に戻れたのは、「へんてこ」な人々と出会い、「へんてこ」が強く生きていくための術を学んだから。「クーツェ」が「ぼく」を踏み続け、「へんてこ」たちと出会わせてくれた。